

多面的・多角的に
歴史をとらえよう！

イメージから 人々の生活や文化を学ぶ



東京大学史料編纂所 黒田日出男

帝国書院の『社会科 中学生の歴史』は、国際化時代にふさわしい教科書として構想され、生徒たちが歴史について「考える」ことができるように作られている。どのような意図と特色をもった教科書であるのか、本文執筆者である4名が、それぞれの立場から4回にわたって述べていくことにしたい。

絵画や写真の豊富な教科書

この教科書は、開いてみるとカラフルであり、図版がとても多い。もちろん、ただ多いのではない。図版についてのしっかりとしたコンセプトをもって、この教科書は作られている。挿絵のどれもが、一つひとつ慎重に選ばれ、生徒たちの学習に役立つように工夫されているのである。

いったいどんなコンセプトなのかというと、その第1は、歴史とはイメージ豊かなものなのだということを示そうとしている。

従来の教科書では、挿絵について十分な検討がなされず、絵画や写真などの生き生きとした利用がなされてきたとは言えなかった。しかし、それではなるまい。図版の一つひとつは、各時代がどのような社会であったのかを物語るとても大切なイメージなのであるから。

第2には、挿絵にもちいた絵画や写真などのイメージは、それぞれ独自の価値をもった

重要な素材（史料）なのである。それらは、文字で書かれた史料よりもはるかに雄弁に歴史を物語ってくれる場合さえ決して珍しくはない。そこでこの教科書では、図版の積極的活用に工夫を凝らすことを課題とした。

すなわち絵画や写真は、生活や文化の具体相を生き生きと伝えてくれる。そこで、それらの絵画や写真が示している各時代や社会・経済・文化のイメージをバランスよく、適切に示すことに努めたのである。

そして第3のコンセプトとして、それらのイメージから歴史を読み取ることができるように、そして歴史を考えられるようにしようと試みた。「どうしてそうなったのか」、「なぜこのように変わったのか」といった歴史上の疑問は、生徒たちにとって、抽象的な言葉で論じるよりも、具体的な画像を見ながらのほうがずっと考えやすい。とくに、人々の生活や社会の変化そして文化などは、絵画や写真などによって生き生きと伝わるし、それをもとに皆で話しあうと、自分たちなりの見解を生み出すことも可能だろう。

絵画に描かれたトイレと人糞尿施肥

この教科書の工夫を一つだけ例示しよう。

図1は、四つの絵画の場面で構成されている。①は平安末（12世紀末期）に制作された『餓鬼草紙』の一場面であり、街角の一角に、

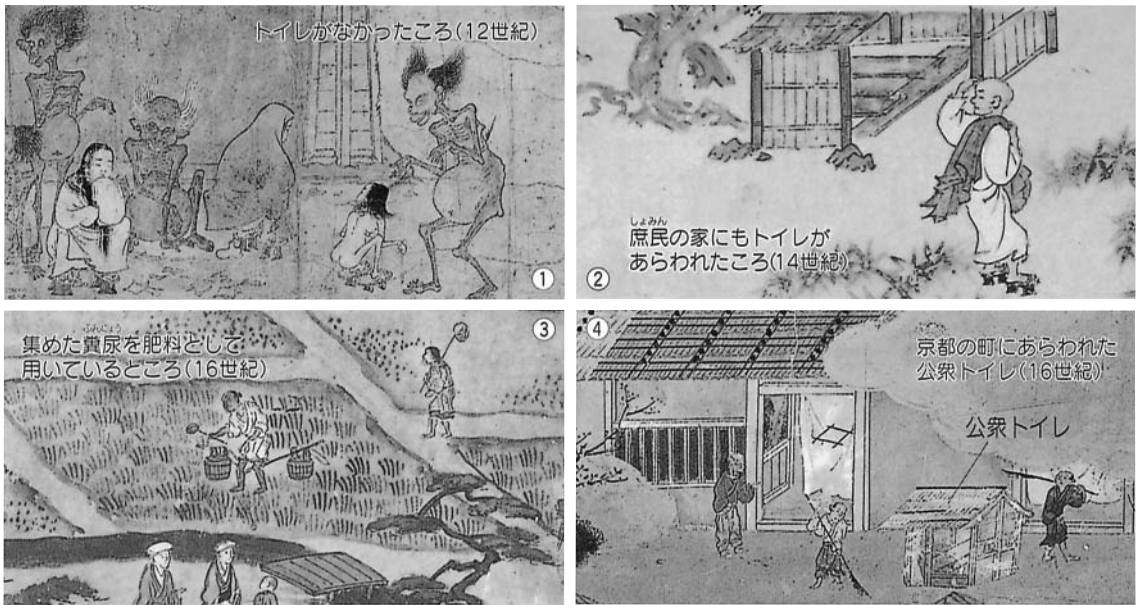


図1 トイレの発達と肥料 帝国書院「中学生の歴史(最新版)」p.77

人々が思い思いにやってきて、排便しているところである。女性や子どもがおもいおもいに座って排便している。周囲にいる髪がぼうぼうの、腹だけが大きな、痩せこけた者たちは餓鬼であり、人々の便を食べようと待ち構えている。この場面からは、どうやら京都のような都市でも、12世紀末期にはまだ便所が発達していないこと、街路の一角が住民たちの共同便所ようになっていたことを読み取ることができるだろう。

②は南北朝時代(14世紀)に制作された『慕婦絵詞』に描かれた寺院の便所である。竹の柱に板壁の簡素なトイレであり、よく見ると、穴が掘られており、そこには板が渡されている。すなわち14世紀頃になると、絵巻にこのように描かれるようになるほど、便所が普及しつつあったのである。

③は戦国時代の16世紀前期に制作された歴博甲本(町田本)洛中洛外図屏風に描かれた田園風景である。中央の農夫が柄杓をもち、桶から液体をすくいって田圃にほどこして

いる。この桶は肥桶であり、その初見なのである。この場面によって、16世紀初頭の日本では、人糞尿施肥が普及しはじめていることが確かめられる。日本の農業が多肥の本格的な集約的農業へと向かっていったことを示す、これ以上のものは得られない、すばらしい歴史のイメージなのである。

④は、戦国時代の16世紀後期に制作された歴博乙本(高橋本)洛中洛外図屏風である。場面中央には、小さな公衆便所が描かれている。京都などの都市の発達は、このような公衆トイレさえ生み出していたのであった。人々の排便はかくして溜められ、肥料の原料として有料で引き取られるようになっていった。

江戸時代には、大坂・京都・江戸の三都だけでなく、全国各地に城下町や港町などが簇生したが、それらの都市でも、家々には便所が作られ、そこに溜まった人糞尿は、定期的に汲み取られ、最も重要な肥料の一つとして利用されたのである。

生徒たちは、これら4つの場面をじっくり

と観察し、そこに日本農業の発達や都市と農村の密接な関係を読み取り、歴史を学び取ることが可能になる。

実際、生徒たちも糞尿譚は大好きである。これらの場面の読み取りに基づく議論は大いに盛り上がるだろう。そのような活発な議論を通して、農業における人糞尿施肥の果たした役割や、農業の発達と都市の結びつきなどについての的確に学ぶことができるだろうというしだいである。

結桶の登場と生産・流通革命

ところで、③の場面の肥桶に注目すると、さらに豊かな歴史の読み取りが可能になる。その桶は結桶ゆいおけ（杉板をたがで締めてつくる丈夫な桶）なのである。

古代や中世前期の日本では、曲げ物（うすくはいだ檜の板などを丸めてつくった桶）が使われており、その強度には限界があった。大きな桶をつくることもできなかった。また、酒などの醸造には陶器製の瓶が使われており、やはりその大きさには限界があった。それらの限界を打破したのが、丈夫な結桶の出現とその普及であった。結桶師たちが巨大な桶を作るようになり、生産や流通に革命的な影響を与えたのであった。たとえば、酒や醤油などの醸造業では大量生産が可能になったし、それらの輸送にも巨大な影響をもたらした。つまり近世では、瓶に比べてはるかに頑丈な樽に詰められた酒などが、樽回船などで大量に運送されるようになったのである。

自分たちで考え、楽しく学べる教科書

このようにして、絵画などのイメージ史料

を活用することによって、この『社会科 中学生の歴史』は、「なぜそうなったのか」といった歴史の疑問を考えることのできる教科書となっているし、生徒たちにとって楽しく学べる教科書となっていると思う。

国際化の時代にふさわしい教科書とは

考えてみれば、そもそも日本文化を代表する特質の一つは、絵画・マンガ・アニメーションなどのイメージを創造する力にあった。たとえば、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」などは、世界中で大ヒットしている。極端な言い方をすると、日本の文化のなかで、今、世界が一番注目しており、しかも高い評価を与えているのは、それらなのである。

絵画などの図版を活用して、生徒たちの積極的な思考をうながす、この帝国書院の教科書の特徴は、そうした日本文化の特質を生かしたものであると、わたしは考えている。

次回の検定をめざして、今、改訂作業を進めている次期の教科書は、現行本の基本的な特色は残しつつ、積極的な改善を施したものとなっており、熟成した教科書としてできあがりつつある。期待に十分こたえられるものとなるだろう。



©藤子プロ・小学館

アジア各地で翻訳された日本の漫画
帝国書院「中学生の歴史（最新版）」p.221